

## ●米増産に茅場を転用

日南市酒谷は地域ぐるみの村おこし活動が盛ん。特に坂元棚田は一九九九（平成十一）年、「日本の棚田百選」に認定され、その文化的価値や国土保全、動植物生態系の維持などに果たしている役割が高く評価された。

日南と都城市を結ぶ国道222号の道の駅「酒谷」前から谷川沿いに北へ約二・七キロ。小松山（標高九八八メートル）から続く起伏の少ないならかな南西斜面に坂元棚田は広がる。標高約二百メートルの山間部で、近年は、難所だった国道の峠越えも改良され、棚田を訪れる人も多い。

江戸時代、上酒谷村は薩摩藩に隣接、坂元など要所に飢肥藩の下級藩士たちが定住して藩境を固めていた。道の駅から坂元棚田に至る途中、田んぼの一角に残る六地藏塔に当時の様子がしるされる。

大正末、田地の少ない酒谷村では、屋根をふ

くための集落共有の坂元茅場を棚田に変え、米を増産する計画が持ち上がった。一九二八（昭和三）年には坂元耕地整理組合を設立、棚田工事が始まった。石積みはすべて現地の自然石と大石を割ったものを使い、三三（同八）年八月、約百枚、五畝の棚田が完成した。棚田は馬耕が前提で、田一枚当たりの面積を五アールとしてあぜ道などがつくられた。

完成後は農家の努力で米の増収がはかられた。しかし、昭和三十年代からの高度成長期に若者が流出。五十年代には主要産業の林業不振、少子高齢化も進行して一九五〇（同二十五）年に五千百三十一人だった人口が二〇〇二（平成十四）年には千三百七十一人にまで減少した。

そんな中、九四（同六）年二月、地域住民による村おこしの組織として「やちちみるかい酒谷」が結成された。多くの人に自然豊かな酒谷

を知ってもらい、ふるさと酒谷を見直すきっかけになれば、との思いからだった。

その後、小布瀬の滝と遊歩道、酒谷キャンプ場、日南ダム、大谷石橋などをテーマとしたイベントを企画。坂元棚田もこの中で売り出しに力を入れた。

棚田を保全し、後世に伝えるため、農閑期にレンゲの種や彼岸花の球根を植え、四月に花いっぱい棚田祭りを開催、六月には棚田田植え、十月稲刈りといった行事を定着させた。さらに棚田オーナー制度も導入するなど活発に活動。現在、十二戸の農家が水田として七十枚の棚田を耕作している。ここで収穫した米は道の駅「酒谷」で食することができる。

長友禎治



棚田での稲刈り。地域おこしに棚田は大きく貢献している